藤原京と遷都

飛鳥から藤原京への遷都は、日本初の条坊制に基づく都市の出現であった。そのわずか16年後、都は平城京へと遷る。藤原京の造営や平城京への遷都に関する問題について考える機会があったので、ここで要点を記すこととする。

1　藤原京への遷都

岸俊男氏の南北12条、東西８坊の藤原京域復元に対し、小澤毅氏らは十条十坊の京域で、その中心に藤原宮があるという「大藤原京」を提示し、現在はそれが有力となっている。藤原宮の位置については、京造営時には唐との国交は断絶しており、『周礼』「考工記」記載の周王城に基づいた理想の都づくりを行ったと説明されてきた。これは、『周礼』の①方九里（正方形の都城。）、②旁三門（各面に三門ずつが開く。）、③国中九経九緯（南北と東西に九本ずつ道路。）、④面朝後市（宮前面に政治の場、後方に市。）という記述を根拠とし、藤原宮の位置や京内の条坊道路のあり方等を見事に説明したとされた。

小澤氏の一連の論考は、発掘調査成果に基づいた京域の復元であり、藤原京の形制に関して一定の理解を与えたものとして高く評価されるものである。一方、その後の調査の進展で新たな事実が判明し、『周礼』「考工記」に関する研究も進み、国中九経九緯は歴史的には縦横九本ずつの道と必ずしも解釈されてはこなかった[1]と示される等、前述①～④の解釈には疑問が生じている。ここでは詳細は省略するが、藤原京は『周礼』と厳密に一致する点はきわめて少ないのであり、造営は他の原理に基づくと考えられる[2]。

藤原宮朝堂院で見つかった大宝元年（701）の幢幡遺構は、古代国家の成立過程を考えるうえで画期的な発見であったが、そこに藤原宮の位置決定を解く鍵を見いだすこともできる。幢幡の配置は陰陽五行説に基づくものであることが解き明かされ[3]、陰陽五行説こそが当時の人たちが共通して抱いていた理念であり、世界観であったことが知られる。藤原宮は、『万葉集』「藤原宮の御井の歌」にみるごとく大和三山に囲まれた位置にあり、はるか南方には吉野の山がつらなる。東の香具山を青龍(木)、西の畝傍山を白虎（金)、北の耳成山を玄武（水)、吉野の山を朱雀（火）とみれば、藤原宮の位置は（土）となり、陰陽五行説の姿にまさにふさわしい。岸俊男氏が京極大路とみた中ッ道、下ッ道、横大路との関係も含め、宮の位置はこの様な理念で決められたとみられる。こうして決定した宮をもとに、同じく陰陽五行説に基づくキトラ古墳壁画、特に天井天文図の世界観、即ち天帝の居する紫微垣および太極星（北極星）がある内規を中心として、その周囲に天界（外軌）が広がる状況（図81）を地上に出現させたのが、藤原京だったのではなかろうか。

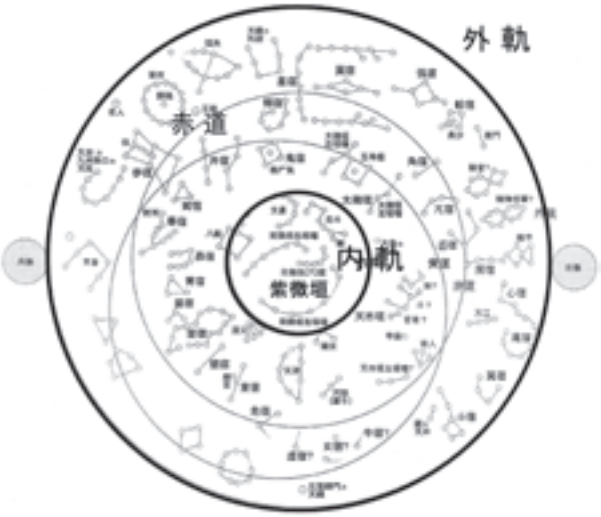

図81　キトラ古墳　天井天文図

図82　藤原宮を北端に置いた場合の藤原京

一方、現実的な理由もあったのだろう。図82に示したのは、唐長安城に準じて宮を北端に置いた場合の藤原京である。一見してわかるように、京の南半部は丘陵地となる。さらに最も大きな問題は、丸印で示した古墳の存在である。その中には推古天皇初葬地と推定される植山古墳や、真の斉明天皇陵の可能性が高い牽牛子塚古墳があり、そこを京域に含めることはありえなかったのであろう。以上二つの観点から、宮と京の位置関係を決定したものと考える。

2　藤原京からの遷都

大宝２年（702）に遣唐使をおよそ30年ぶりに派遣して実際に唐長安城を見聞すると、宮は京の北端にあり、『周礼』に基づいた藤原京との形制の違いに衝撃を受けたに違いないとし、これが遷都の主たる理由とされた。これは上述したような理由から再考すべきであるが、大宝２年派遣の遣唐使がもたらした情報の関与はやはり大きかった。遣唐使が中断していた間、武則天が中国史上唯一の女帝として即位し、国号は「大唐」から「大周」となった。武則天は大明宮麟徳殿で遣唐使に謁見した。その時、遣唐使は新たな宮城の「大明宮」、ならびにその中にそびえ立つ「麟徳殿」と「含元殿」の二つの殿堂を目にしただろう。この太極宮と大明宮の二つの宮殿、および含元殿と麟徳殿の並立こそが、金子裕之氏がかつて指摘した[4]とおり、それまで知り得なかった最新情報なのである。

藤原宮は中国風の礎石建ち瓦葺きの殿舎を初めて採用し、その造営にあたっては、様々な試行錯誤があったことが発掘調査によって明らかになっている。大量の建設資材を運搬するためには、宮の中心部に南北の運河を掘削した。この運河は内裏や大極殿、大極殿院南門の直下を通っており、殿舎の建設が進むにつれて順次埋められていった。この造営方法が、後に決定的な不都合を引き起こす要因になったとみられる。

これまでの調査で、大極殿院や朝堂院の各所で検出した運河の様子をみると、例外なく埋立土が陥没し、上面の地盤沈下を引き起こしている。今年度調査した大極殿院北部では、地盤沈下が著しいために二度にわたって整地をしていた状況が明らかとなった。そのうえ、運河が陥没した部分に溜まった水を排水するために、一度積み上げた北面回廊の基壇を掘り抜いて排水溝を通す状況も判明した（飛鳥藤原第198次調査：本書62-87頁）。地盤沈下への対応に苦慮していたことがよくわかる。大極殿の建つ地盤も、掘込地業を施していないためにおそらく沈下し、かなりの問題が生じたことだろう。大極殿院南門で掘込地業をして地盤を固めているのは、その不具合を解消しようとしたものと理解できる。この経験は平城宮造営にも受け継がれ、大極殿の立地は強固な地盤上に求め、地形の低い大極殿院回廊西北部では地盤を徹底的に強化したのであろう。また、朱雀門では大規模な掘込地業を施し、佐伯門前の運河の埋め立てに敷粗朶工法を採用して地盤沈下を防ごうとしたりしたこと等も、あらためて合点がいく。

このように、藤原宮の中枢部は低湿な状況であり、必ずしも良好な環境ではなかったのである。唐長安城は藤原京と同様に南が高くて北が低く、太極宮は低地で湿潤な場所に位置していた。太宗は退位した父高祖のために、高燥な場所に大明宮の造営を開始した。太宗自身は太極宮で長く朝政を執り、50歳代初めには亡くなってしまった。後を継いだ高宗は病気がちであったと言われ、太極宮から大明宮へと居を移した。こうした情報が遣唐使によりもたらされていたことは、想像に難くない。田辺征夫氏が述べる[5]ように、これが遷都の要因となったことは首肯できる。藤原宮では草壁皇子、文武天皇と続けて20歳代で夭逝しており、上述したようなことが平城京遷都の詔にみる「王公大臣がこぞって望む」背景だったのではないだろうか。飛鳥藤原第198次調査で、地盤沈下と滞水の問題と、それに起因する大極殿院から内裏にかけての居住環境の悪さが具体的な形で明らかとなった。これが遷都の大きな要因であったことが、考古学的にも裏付けられたと言えよう。　**（玉田芳英）**

註

1）布野修司「『周礼』「考工記」匠人営国条考」『traverse 新建築学研究』14、京都大学建築系教室、2013。
2）玉田芳英「古代都市　藤原京の実態」『奈文研第10回東京講演会予稿集』2018。
3）松村恵司「藤原宮の幢幡遺構を読み解く」奈文研HP コラム作寶樓、2017。
4）金子裕之「藤原宮」『古代都市文化と考古学』季刊考古学別冊５、雄山閣、1994。
5）田辺征夫「平城遷都の要因と日本古代都市の一特色」『奈良県立大学研究季報』第25巻第２号、2015。